

I-2

なぜ「失われた20年」と呼ばれるようになったのか

1968年以来、日本は米国に次ぐ「世界第2位の経済大国」という立場を維持してきました。ところが、バブル経済の崩壊から約20年経った2010年、日本は世界3位に滑り落ちました。経済成長著しい中国がGDP(国内総生産)の大きさを日本を上回ったからです。そればかりではありません。わずか3年経った2013年、米ドル換算ながら中国のGDPは日本のGDPの2倍近くにまで膨れ上がりました。短期間にこれだけ大きな差が開いたのはなぜでしょうか。GDPの中身を知れば、「失われた20年」の間に世界経済の勢力図がどのように変わってきたのかが分かります。

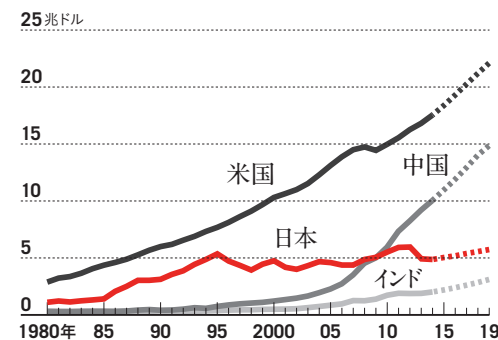
一国が1年間に稼いだお金の合計：GDP

GDPは、Gross Domestic Productの頭文字を取ったものです。端的に言えば、その国に住む人々が1年間に生み出したモノやサービス(付加価値)などの合計となります。GDPはその国の経済状況を包括的に知る上で最も重要な統計で、経済政策を立案・運営するためにも欠かせない指標となっています。

図I-2-1では、1980年以降の日本、中国、米国そしてインドの名目GDPを示しました。株価や不動産価格が高騰した80年代後半は「バブル景気」と呼ばれ、日本のGDPは右肩上がり伸びました。

ところが90年頃にバブルが崩壊すると経済成長率が大きく鈍化し、マイナスを記録することもありました(詳細は図I-2-2を参照)。銀行の不良債権処理がなかなか進まず、経済が停滞した90年代は「失われた10年」と呼ばれていました。ところが10年経っても景気は大きく好転せず、低成長に喘ぐ期間は20年近くにも及びました。

▶ 図I-2-1 主要国の名目GDP推移



出所：IMF「World Economic Outlook(April 2014)」
注：2013年までは実績値で2014年以降はIMF予測値

この「失われた20年」の間に大きく飛躍したのが中国です。89年に天安門事件が起きて国際的に批判を浴びたものの、92年から経済の改革・開放路線を推し進めました。豊富で安価な労働力を生かして「世界の工場」となった中国は90年から2010年までの20年間に、米ドル換算でGDPを15倍以上に拡大させました。一気に日本を抜き去り、世界第2位の経済大国に駆け上がりました。

実質GDPの伸び率が経済成長率

2010年以降、中国経済の成長速度は鈍化してきました。それでも国際通貨基金(IMF)は2010年代の後半において、中国は6~8%程度の成長を維持できると予測しています。その予測通りならば、2020年頃に中国の経済規模は米国にかなり肉薄することになります。近い将来、GDPで米中が逆転する可能性も指摘されているのです。

世界経済の勢力図を塗り替えているのは中国だけではありません。同